

薬師堂

薬師堂は圓教寺で最も古い建物である。1978年に建物の大規模な改修が行われたとき、奈良時代（710-794）の遺物が内部から発見された。これらの遺物の存在は、この場所が圓教寺の開祖である性空上人（910-1007）が966年に書寫山に到着する以前から宗教的な意味を持っていたことを示している。何世紀にもわたって、何度もの改築や増築が行われてきたため、この建物の建築史を正確に追跡することは困難になっている。それにもかかわらず、大きな主柱と装飾的な屋根の梁は、それが大仏様（だいぶつよう）と呼ばれる初期の大陸の寺院建築の様式に基づいていることを示している。

このお堂は「癒しの仏像」あるいは「医術の達人」として知られている薬師如来を安置していることから名づけられた。薬師如来は健康と癒しの仏様で、朝廷の人々に人気があった。6世紀に仏教が導入された後、崇拜の対象となった最初の仏様の1人であった。薬師如来崇拜は、仏教が一般庶民階級に人気を得て、多くの寺院がその像を祀るようになった8世紀に広まった。ほとんどの場合、薬師如来は薬瓶を左手に持って表現されている。ここ圓教寺の薬師堂の薬師如来像は、室町時代（1336~1573年）に製作されたもので、圓教寺の食堂の2階に展示されている。